

英国における戦略的公共空間デザインのしくみ ーロンドン・トラファルガー広場の事例をめぐってー

高松 誠治

Seiji Takamatsu

正会員 工修, MSc

Space Syntax Limited (英国)

空間の「デザイン」というと表層的、装飾的なものと捉えられる向きがわが国ではまだまだ根強い。実際には、多様な価値観や目的を持った多くの人々の利用という観点から、より好ましい空間の状態をつくる行為であるべきで、英国においてはそのような意識がより浸透しているように思われる。ここでは、最近大きな注目を集めたトラファルガー広場の再生プロジェクトの事例を紹介しながら、デザインが決められる過程について考えていく。

プロジェクトの概要

ロンドンで最も有名かつ地理的な中心であるトラファルガー広場について、1990年代に多くの問題が指摘され始め、多公共団体の連携による再生プロジェクトが行われることとなった。まず、その概要について以下に記す。

[主体] 大ロンドン市、市交通局、ウェストミンスター区、政府ロンドン局、文化・メディア・スポーツ省等が主体となり、専門家による検討チームを召集した。

[検討チーム] アーキテクト/マスタープランナー、交通コンサルタント、アーバンデザイナー、歩行者動線の専門家、費用対効果の専門家、造園デザイナー等がメンバーとして選ばれた。

[財源、関係法規等] 主な財源は、市交通局の街路運営予算と、宝くじ基金である。景観規制や公共空間の整備方針に

ついては、ウェストミンスター区の地区計画である Unitary Development Plan に、また加えて2000年の大ロンドン市設立後は、市長名による空間整備計画である The London Plan にも定められている。

[背後にある考え] 市民・観光客などあらゆる人に使われる広場を目指した。また、市長が標榜する「ロンドンを世界で最も『歩きやすい街』にする」という点も重要な視点として位置づけられた。

[意思決定のしくみ] 基本的にはデザイン責任者であるノーマン・フォスター卿がリードしてすすめられたが、実際には、客観的なデータ、チーム内の各方面の専門家の意見を踏まえてデザインが決められた。

[評価システム] CABE(Commission for Architecture and the Built Environment: 政府の基金による公的組織)のデザイン評価委員会(都市・建築の専門家のメンバーからなる)が助言を行った。イングリッシュヘリテージ(歴史的建造物・地域に関する国の法定団体)も歴史遺産の保全の観点から検討プロセスに参加した。

[情報公開、世論] 公聴会(public consultation)において、市民に向けて設計案の説明が行われ、ここで得られる意見を踏まえてデザイン案が再検討された。また、高級紙、一般紙、テレビ等、各メディアも盛んに取り上げた(財政的、政策的な面だけでなく、デザインの質や技術的な点も含め)。

[完成・事後評価] 2003年7月に再生オープン。市民の関心も高く、概して高い評価を得ている。また、当初の目的を実現しているかどうかを検証するため、従後の歩行者の行動調査が行われ、良好な結果を得た。



写真-1 リニューアル以前のトラファルガー広場。高い壁の後ろは車道、さらにその背後に見えるのがナショナルギャラリー。

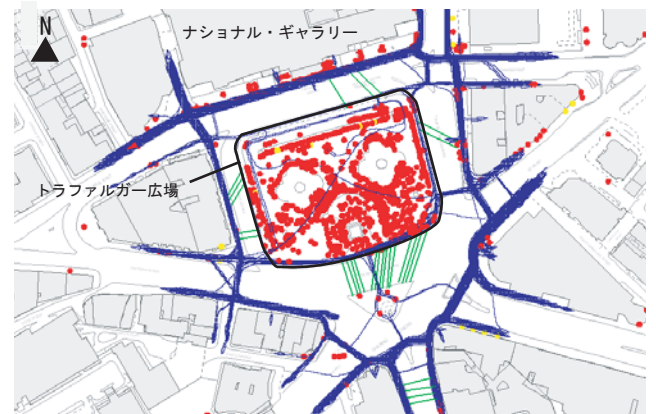


図-1 従前の歩行者行動調査結果。青い線は地元市民のルート追跡を、緑の線は観光客の不法横断を、また赤い点は立ち止まっている観光客をそれぞれ表している。市民が広場内をあまり通っていないことや、南側の交通島への不法横断などのパターンなどがわかる。ベースマップ: (C) Crown測量図 LA100032379

検討課題、デザイン主旨について

次に、検討段階における具体的な課題を挙げる。

課題1：観光名所であり、絵葉書にも見られる象徴的な景観を持ちながら、“市民の広場”としては実は機能していない。周囲を自動車交通にとりかこまれ孤立した空間となり、またナショナルギャラリーとの間には高い壁が存在する。多くの市民は広場を避けて通っていることが調査によって判明した。(写真-1, 図-1)

課題2：記念撮影に勤しむ観光客にとっても広場周辺の歩行環境は質が低い。特に広場南側の狭い交通島への不法横断が目立つ。視界が開ける場所であるからということがわかる。(図-1)

課題3：この広場は最上級の登録文化財であり、また北側道路との境の壁面にある“Imperial Standards of Lengths”という基準尺も、Grade IIとして登録されている。これらの文化財の継承が求められる。

これらの課題を解決し、総体としてまとめるデザインの主なポイントは以下のとおりであった。(図-2)

主旨1：広場北側の壁の中心部を階段にかえることにより、広場のアクセス性を向上させる。文化財の壁については、階段の側壁として活用することで継承する。

主旨2：北側道路を歩行者専用化し、また、南側に小さな円形交差点を設けることにより、広場周辺の歩行者環境を改善する。ロンドン市街地の渋滞税による将来の自動車交通量の低減も考慮に入れる。

主旨3：上記2点によりロンドンの中心としての広場の機能、使いやすさを高めるとともに、各方面からの動線を物理的・視覚的に繋ぐことにより、市内の多くの名所・エリアの関係を強め、延いては地域全体の魅力の向上を図る。

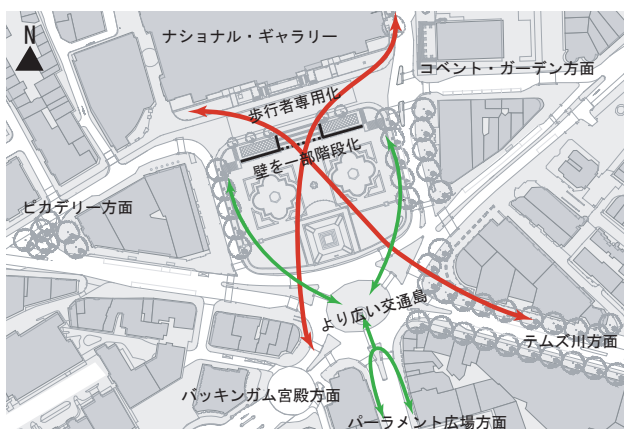


図-2 デザイン検討における、歩行者行動パターン検討図。赤い線が、ロンドンの主要な観光地・繁華街を結ぶ主要動線を、緑の線が、この広場と交通島、さらにパースメント広場を結ぶ動線を示している。ロンドンの主要ルートの結節点としての広場の役割は大きい。ベースマップ：(C) Crown測量図 LA100032379

景観・空間デザインのしくみを考える

英国における公共空間デザインの意思決定の流れは、以下のようなものであるといえる。

- 市長のリーダーシップにより地域の方向性を定める。
- その方向に沿ったデザインを専門家チームが提示する。
- 関係団体や市民の意見を聴取し、再検討する。
- これらの検討成果を総合して、自治体が任命するインスペクター(検査官)が計画許可の審査を行う。

基本的にトップダウンのしくみであるこの方法が日本においてなじむかどうかかわからないが、行政のリーダーシップの重要性や、客観的なデータを交えたわかりやすいデザイン主旨を市民やメディアに向けて発信することなど、少なからず学ぶべき点はあると思われる。

英国では公共空間におけるデザインの評価の論点をはっきりしている。つまり、「古き良きもの」の保存と「現在」の人々の生活・価値観との共存・バランスというものである。日本ではどうかと考えた時、地域のアイデンティティや将来像という点において、拠り所となるものが見えにくいケースが多いのではないかと。つまり、ある地域の将来目指すべき姿を考える時、何を残して何をどう改善すべきかの基準がはっきりしない。

その答えをはじめから地域住民まかせにせず、専門家が客観的に分析・提案し、それを人々に評価してもらおうというのが正しい順序ではないかと思う。私たち技術者は、建築・土木の垣根を超え、経験や感性の部分と、客観的な分析・評価の部分の両方の点から、技を磨き、専門性の高いサービスを提供していきたいものである。

参考文献および補足

- 1 - World Squares for ALL, Masterplan, Foster and Partners 1998
- 2 - 英国の都市計画における法制度については、中井検裕、村木美貴：英国都市計画とマスタープラン、学芸出版社、1998 が詳しい。より近年の情報については、Town and Country Planning in the UK, 13th Edition, B. Cullingworth and V. Nadin, 2002 など。
- 3 - 英国における土木技術者の活躍・評価については、土木学会英国支部の報告(話の広場、本誌2004年5月号)を参照。



写真-2 現在のトラファルガー広場(2004年11月)。新たに設置された大階段の先に、改装中のナショナルギャラリー正面玄関が見える。